

『子ども学のはじまり』

津守 真 著

フレーベル館発行

阿部 明子

春休みに、一歳三か月の双子の甥が来宅した。ふたりとも靴をはかせようとすると極端にいやがる。この子たちの兄も、はじめて靴を買い求めにいった時、足にあうものをとのかせようとしたら、店中がひっくり返るぐらいに泣いて反抗した。私の所は女の子でふたりとも靴をはいて外に出ることは大好きで、殊に、父親の大きな靴をひきずっていた姿を思い出す。

また、未満児保育についての話が出た時、大先輩である川田百合子先生が、「二歳児が靴を脱いで水を汲んだり出した

りしているでしょう？ 保育者は見守ってやらすにすぐ止め  
てしまおうのね。」といわれた。

こうした時、私たちは、どうしてなのかなと一応は考える。そして、その子の機嫌とかやらせ方とかなどには思いを及ぼすが、更に同じような場面での共通点や靴の持つ意味までには思い至らない。

子どもの立場になって考えよう、ということはやさしいが、真に子どもの心を察することは非常に難しい。しかしながら、子どもについて知るためには、より子どもの心に近づくことをしなくてはならない。津守先生は御自分の体験から、その可能性を示され、更に、そこから文化論へと筆をすすめられている。

「子どもが外に行こうとする意欲の前に、靴は姿を消してしまふ。母親が追いかけてはかすとき、靴は社会のわくを代表するものとなる。」

「現代の日本人のはきものは、他の国に見られないほど多様でありながら、社会の常識にかなって、安価で便利で、見たところがきれいならよいという性質が強い。その性質は日常生活や、教養のすべての面についてもいえるのではないか

と思う。子どもの教育についても、文化の質は問題にされず、現在の社会生活の表層にあわせてしか考えられていないことが多いのではないか。”

“保育者として、また第三者として子どもにふれるところには、どこにでも、子どもの世界が開かれている。その直接の経験を手がかりにして、それは何であるかと探っていくところに、子どもの世界の理解ができていく、素材は無限に近く、われわれの理解はまだ表層にとどまっている。”

これらのことばが、私が如何にいい加減に子どもをとらえ、わかっているような顔をして子どもとつきあってきたかをついてくる。同時に、幼児の文化は生活文化であるから……などといいもし、日本の文化の伝承を保育の中でどう消化したらよいかを考えていたのが、まだまだ観念的ではなかったことに気付かされた。

“保育論が文化としてわれわれの中に根づいていく必要があると感している。”と述べられている点が、私自身に最も感銘が深かった。

この本は、津守先生が昭和四十年代に、主として『幼児の教育』に発表された論文集であり、保育の過程、子ども学

はじまり、倉橋惣三の保育論の三部からなっている。

幼児学でも児童学でもなく、ひとりひとりの子どもを、その子どもの存在の重さを受け止めた時にこそ、表題の子ども学ということばがびったりする。さまざまな子どもにふれ共にひとときの体験を過されながら、先生の思いの中に子ども学ということばが生れたのであろう。

子どもたちが、陽の光や風の動きを身体全体でまた、心の奥底でとらえる。その快さを基盤として成長する上でのさまざまな問題点をあげられているが、五十年代に入っても、保育や教育の状況は好転のきざしはみえない。保育者が時流に流されず、もう一度、第一歩からやり直すために、本書を手がかりにされることをのぞみたい。

たしかに、あとがきで述べられているように、全体としてわかりにくい点があきにもあらずだが、細かい現象にはひとつひとつ胸を打たれる。そこで、大変勝手に、最初に述べたような感想を中心に紹介させて頂いた。先生の本意にもとるところがあればお許しいただきたい。更に、この先の研究の発展と発表を心待ちしている。

(東京家政大学)